夕刊フジ

リハビリ物語 人が人を救う ⑪

ギランバレー症候群

手足が動かない難病を克服し出産…育児不安も訪問ドクターに励まされ

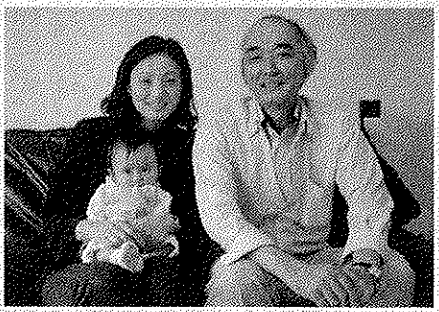
桜新町リハビリテーションクリニック・長谷川幹医師

「昨年の6月に右足先のしびれが1週間ぐらい続き、とうとう歩けなくなってギランバレー症候群と診断されました」と新牧章代さん(36)。

ギランバレー症候群は女優の大原麗子さんも患った10万人に1人の難病。筋肉を動かす運動神経の障害のために、急に手や脚に力が入らなくなる。歩行や起立が困難になり、手足のしびれや自律神経の障害、嚥下障害などを伴うことも。重篤な場合、呼吸困難になるため気管切開をして人工呼吸器を付けることもある。

実は新牧さんは妊娠5カ月の妊婦だった。妊婦の事例はアメリカでは4例ほどで、筋肉が脱力した状態で生まれた新生児もいる。最悪のことを考えた新牧さんは絶望して「お腹の子供と一緒に死にたい」と夫に涙で訴えたが、「残された俺と1歳半の息子のことを考えてくれ」と逆に夫から叱咤激励されたという。

嚥下障害はすぐ回復したが、手足の障害が残った。妊娠の経過は順調だったため、10月には神経内科から産婦人科へ転科。そこで出産直前まで自主トレを含めて1日6時間ものリハビリに専念。そして11月、自然分娩で無事長女を出産。五体満足だった。



長女を抱きかかえ回復を喜ぶ新牧さん㊨と長谷川医師

「でも出産後、体力が低下したので、子供を育てられるのかと不安になりました」

そんな新牧さんを精神的に救ったのが、桜新町リハビリテーションクリニックの長谷川幹医師だ。退院した新牧さんを訪問診察したときに「歩けるようになるよ」と励まして筋力トレーニングなど具体的なリハビリメニューを作ってくれた。家具に捕まりながら家の中を歩いていた新牧さんは次第に筋力を回復し、今では子供を抱きながら歩けるようになった。

今では社会復帰も

「患者さんの病気に対する理解度を探り、心理状態によって言い方を工夫します。そして『できたね!』とできるだけ肯定的な言葉で確認し合います」

患者は誰でも以前の自分と比較して今の自分を見つめる。気が滅入ることだって多い。そのことを理解している長谷川医師は、患者の心にできるだけ光が見えるように配慮しているのだ。

「先生のおかげでリハビリも進みました」という新牧さんは、来年2月に会社に復帰する。

(佐々木真理)